

熊大通信

vol. 47 2013 WINTER

特集 I

熊大iPS細胞若手研究者が語る

未来の再生医学研究

特集 II

巻き起こせ!“総和”のムーブメント

我らが“紫熊祭”



国立大学法人
熊本大学

Kumamoto University

熊大ピープル
毎月更新

knock on the
laboratory's door
毎月更新

熊大の“今”がおもしろい! KUMAMOTO NOW

WEBマガジン
熊大なう。

学生たちと研究のリアルタイムな情報を発信します。

日本一のダイビングを
目指して仲間とともに
社会へDive!

創薬は、世界の
医療を変える!

人の心を動かして、
健やかな良い社会に!

政策創造研究教育センター
河村洋子准教授

薬学部附属創薬研究センター 甲斐広文教授(左)

ダイビング部

「第14回九州音楽
コンクールで
金賞を受賞」

教育学部音楽科

学生が主役になり
楽しい大学にしたい!

大学院自然科学研究科
横瀬久芳准教授

奄美沖で
レアメタル鉱石を
発見!

絵画とは自分の
内面を表現するもの、
魔くもの

教育学部美術教育
松永拓己准教授

熊大広告 KumAnd

熊大なう。



Kumamoto University

国立大学法人
熊本大学

〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2-39-1 TEL.096-344-2111(代)

<http://www.kumamoto-u.ac.jp/>

■黒髪キャンパス ■本荘九品寺キャンパス ■大江キャンパス
[オフィス]東京オフィス・関西オフィス・関西LIEゾンオフィス・上海オフィス・韓国KAISTオフィス・
国際産学連携サテライトオフィス(駐山東大学)・インドネシアITSオフィス・大連オフィス



CAMPUS SCENES キャンパスの風景

リニューアル工事中の 熊本大学附属図書館と 黒髪北キャンパス

緑あふれる黒髪北キャンパスの中で、
現在、熊本大学附属図書館をリニューアル中。
従来の静かな学習空間に加えて
学生が主体的に活動し、学び合うことができる
知的交流の場を目指している。



完成後の外観イメージ



熊大通信 vol. 47

2013 WINTER

熊本大学広報誌 熊大通信

*皆さまのご意見・ご感想をお寄せください。

【発行】	国立大学法人熊本大学 〒860-8555 熊本市中央区黒髪 2-39-1 Tel.096-342-3119 Fax.096-342-3007 sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp
【編集】	熊大通信編集委員会 田中 智之／委員長・大学院自然科学研究科 大辻 正晴／文学部 黨 武彦／教育学部 朝田 康禎／法学部 中田 晴彦／大学院自然科学研究科 永田 千鶴／大学院生命科学研究部 首藤 剛／大学院生命科学研究部 田中 尚人／政策創造研究教育センター 西村 兆司／マーケティング推進部広報戦略ユニット
【制作】	株式会社カラースプランニング

CONTENTS

03	特集Ⅰ	熊大iPS細胞若手研究者が語る 未来の再生医学研究
11	研究室探訪	社会に埋もれがちな“小さい声”に耳を傾けながら 真の社会保障制度の在り方を探る 法学部 倉田賀世研究室
13	特集Ⅱ	巻き起こせ!“総和”のムーブメント 我らが“紫熊祭”
15	国際交流	インタビュー 熊本大学から世界へ 石黒大貴さん 世界から熊本大学へ パトゥムサイ・スーサダーさん
17	卒業生ジャーナル	
19	KUMADAI TOPICS	
22	熊本大学基金よりお知らせ	

表紙／本荘・九品寺キャンパスの熊本大学発生医学研究所に一同に会した熊大iPS細胞若手研究者たち

熊大 iPS 細胞若手研究者が語る

未来の再生医学研究

2012年10月8日、私たち日本人に大変うれしいニュースが飛び込んできた。

京都大学iPS細胞研究所の教授であり、

熊本大学発生医学研究所(P8参照①)の客員教授も務める

山中伸弥教授のノーベル生理学・医学賞の受賞である。

山中教授の受賞は、「再生医療」の実現に

大きな希望を与えるものだ。

本号では、山中教授に続けと、

日夜、研究を続ける

本学若手研究者による対談を特集。

iPS細胞(人工多能性幹細胞)の

過去・現在・未来を中心に、

再生医学研究(P7参照)を取り巻く動向と

彼らの素顔をご紹介します。



ES:iPS細胞の可能性に向き合う

—最初に、なぜ今、皆さんがそれぞれの立場で研究されているのかについて、教えてください。

白木 はい。実は大学時代には薬学部で、肝臓における薬の分解に関わる研究をしていました。大学院修士課程のときに、現在の上司である糸教授(P8参照②)が研究室を主宰すると耳にして、臓器の機能ではなく、臓器を作る研究に興味を持ったのがきっかけです。

研究を始めた当初はマウスのES細胞(胚性幹細胞)のみを扱っていましたが、2009年からはヒトiPS細胞(人工多能性幹細胞)を用いた研究も開始しました。現在まで、これらの多能性細胞から肝臓や心臓を作るといふ研究を10年以上やっています。

2006年にマウスiPS細胞ができた時が最もセンセーショナルでしたね。しかも、翌年、ヒトiPS細胞ができると、これまで規則が厳しくやりにくかったヒトES細胞に比べて、断然使いやすい。ヒトiPS細胞は、病気の患者さんの細胞から作れるので、そこにさまざまな応用の可能性を感じますね。

—iPS細胞誕生で印象的だったのは?

白木 すごいなと思ったのは、早期に理化学研究所がiPS細胞をバンク化したことです。研究者の手に入りやすいシステムを

はじめに

コーディネーター
熊大通信編集委員 首藤 剛

iPS細胞 (Induced Pluripotent Stem cells)とは、多能性幹細胞の1。皮膚などの細胞に特定の遺伝子を入れ、細胞や組織に分化する前の状態に、初期化した画期的な細胞だ。

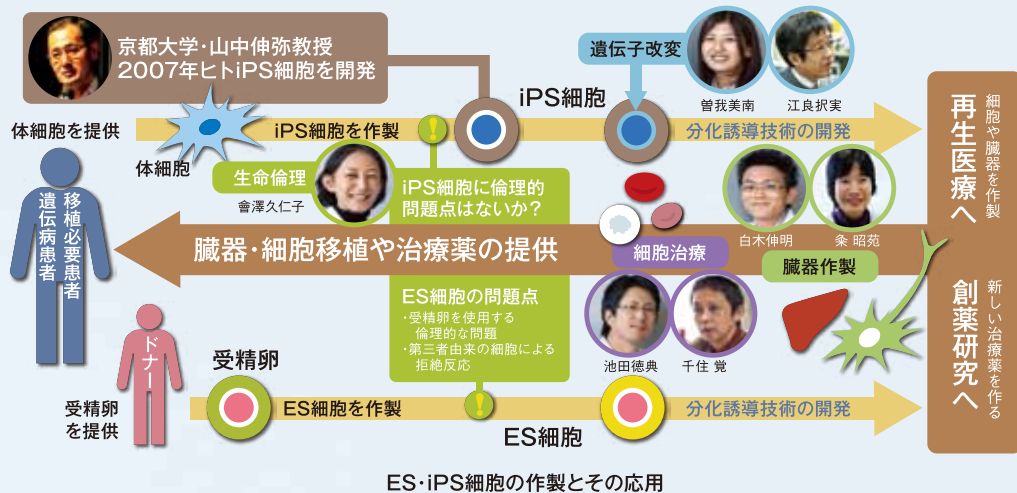
同じ多能性幹細胞であるES細胞 (Embryonic Stem cells)が受精卵から作られるために、生命倫理的な問題や移植時の拒絶反応などの問題を抱えているのに対し、iPS細胞は皮膚などの細胞を使用するため、そのような倫理的問題をクリアできる。

そもそもiPS細胞やES細胞などの幹細胞は、どのような点が優れているのか？ その一つは、病気の治療に必要な細胞・組織などを人工的に作製し、失われた細胞や臓器の機能を取り戻す「再生医療」へ応用することが可能である点である。もう一つは、患者の細胞からiPS・ES細胞を作り、疾患の発症メカニズムや原因などを調べたり、その細胞が、薬に対してどう反応するかなど、その効果や副作用、安全性などを調べるといった、「創薬」への応用だ。つまり、iPS細胞の誕生は、ES細胞の問題点を克服し、

「再生医療」や「創薬」を具現化するきっかけを与えるものなのである。

iPS細胞を開発した山中教授の研究は、「基礎研究」と呼ばれている。一般に、生命科学領域における「基礎研究」とは、研究者の知的探究心を充足し、物事の基本原理を追求しようとするものである。その「基礎研究」で、山中教授がノーベル賞を受賞できたことは、現在、「薬学」の基礎研究に携わる私にはもちろん、本学でまさにiPS細胞に関わる研究を推進する新進気鋭の若手研究者にとっても、大きな希望を与えるものとなった。

今号の特集では「熊大iPS細胞若手研究者が語る未来の再生医学研究」と題し、それぞれユニークな背景を持つ4人の若手研究者に参集いただいた。iPS細胞から実際に臓器を作成する技術を研究する白木さん、医師として診療する傍ら、iPS細胞などを用いた細胞治療の研究を免疫学的なアプローチで試みる池田さん、iPS細胞に魅せられてこの研究領域に入り、iPS細胞バンクの充実と、遺伝子治療の基礎研究に携わる曾我さん、最後に、まだ十分に議論されていないiPS細胞利用の倫理的・社会的問題についてを考えるため、本学で長年研究されてきた會澤さんの4名である。ここでは、熊大iPS細胞若手研究者の世界をお楽しみください。



作ったことで、誰もが使いやすいくなり、研究が促進される環境が整いました。

また、山中教授のiPS細胞ストック構想も当時から提唱されていますね。これは、移植時の拒絶反応が起きにくい白血球の型(HLA)を持つiPS細胞をあらかじめ集めてストックしておき、再生医療に利用できる細胞バンクを作るといふものです。

ヒトiPS細胞が樹立されてわずか5年目にして、再生医療の実現化に向けてこの細胞バンク事業が動き始めたことは、本当に素晴らしいことだと思います。

—曾我さん、バンク化といえば江良研究室では「難病研究資源バンク」が設立されていますが、どのようなものですか？

「曾我 「難病研究資源バンク」とは、難病患者の皮膚組織や血液細胞からiPS細胞を作製し、この貴重な細胞をバンク化し、病気のメカニズムの解明や治療薬の開発に役立てようとするものです。このとき、通常は患者さんから入手できない組織—例えば脳の細胞なども、iPS細胞から培養して作ることができるといふ利点があります。先日、厚生労働省よりiPS細胞などの再生医療に用いる細胞を長期保管する施設の一つとして、熊大が指定を受けたんですよ。

—そもそも、曾我さんは、なぜ江良研究室を選んだのですか？

曾我 私は生物が好きで、福岡女子大学

「熊大という恵まれた環境で研究できる幸せに感謝」

熊本大学発生医学研究所
多能性幹細胞分野助教

白木 伸明

Nobuaki SHIRAKI



Profile / 1999年熊本大学薬学部卒業後、同大学院薬学研究科から医学研究科博士課程へ転研究科し、2006年修了。2009年に熊本大学発生医学研究所多能性幹細胞分野にて、助教に着任、現在に至る。研究は「ES・iPS細胞を用いた内胚葉分化機構の解明および再生医学への応用」など。

環境理学科の生物コースに進学しました。高校生の時は、ES細胞もiPS細胞も知らなくて、大学の講義の中で知り「こんなすごい細胞があるんだ」と感動したのを覚えています。

大学では、最初、神経科学分野の研究室に入って、「ヒドラ」という無脊椎動物の中心のような遺伝子が活動しているかを調べると「遺伝子を読む」プロジェクトに携わっていました。当時は、いくら切っても体を再生できるヒドラの再生能力にとっても興味があったのですが、徐々に、「せっかくなら人々の役に立つ、病気の治療に使える研究をしたい」と考えるようになったのです。

そのような時、大学の先生の紹介で熊大を訪れる機会を得て、ES細胞やiPS細胞の研究が盛んなことを知り、江良教授（P8参照③）にも話を聞くことができました。その研究が魅力的で、「ぜひここでやってみよう」と思い、修士課程から熊大の大学院に入学し、今博士課程2年です。

「数年前までヒドラの研究をやっていたが、皆さんが、今では既にiPS細胞研究に携わっている、曾我さんのモチベーションの高さに脱帽します（笑）。曾我さんは現在、iPS細胞の遺伝子情報を改変する研究を進めているそうですね。

曾我 はい。これが実用化できれば、難病や

「熊大で学んだ生命倫理が今の私を支えている」

国立循環器病研究センター 研究開発基盤センター
予防医学・疫学情報部 研究倫理研究室 研究員

會澤 久仁子

Kuniko AIZAWA



Profile / 2001年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程入学（臨床哲学）。2003年より2年間日本学術振興会特別研究員を務める。2004年同博士後期課程単位修得退学後、米国シガン大学哲学部客員研究員などを経て、2008年より熊本大学グローバルCOE「細胞系譜制御研究の国際的人材育成ユニット」COEリサーチ・アソシエイト（生命倫理学）。2012年4月より現職。

遺伝性疾患の患者さんの体細胞からiPS細胞を作り、その遺伝子情報を正しく書き換えて必要な細胞や臓器を作り出し、それを再生医療に応用することが可能です。

従来の遺伝子治療では、安全性や遺伝子改変効率の持続性の問題などがありまから、やはりiPS細胞ならではの可能性ですね。いずれにせよ「難病バンク」の普及には大きな意義があるのです。

「ところで、池田さんは臨床医でありながら、iPS細胞に関わる基礎研究を千住准教授（P8参照④）のもとで行われていますね。そもそも、なぜ臨床から基礎研究の道へ？」

池田 私は、神経内科の医師として、アルツハイマー病やパーキンソン病、筋萎縮性側索硬化症（ALS）などの神経難病治療に携わってきました。神経難病とは神経の病気の中で、はっきりとした原因や治療法がわからないものをいいます。

正直なところ、完全に治すことができない病気が少なく悩むことも多かったです。そのようなとき、多発性硬化症などの神経免疫疾患は、免疫抑制剤を上手く利用すれば比較的再発を予防できることを学び、免疫のメカニズムをより詳しく知ることができれば、神経難病で苦しむ患者さんの助けになるのではないかと思います、基礎研究に興味を

「人のためになる
楽しいことをやる」

熊本大学大学院医学教育部 博士課程2年
発生医学研究所 幹細胞誘導分野

曾我 美南

Minami SOGA

Profile / 2009年福岡女子大学
人間環境学部環境理学科卒業
後、同年熊本大学大学院医学教
育部修士課程入学。2011年より
同博士課程、現在に至る。研究は
「Therapeutic IPS (TIPS) 細胞を
用いたC型肝炎ウイルス感染症に
対する新規治療法の開発」など。
「発生研学生会」代表も務める。



持ったのです。ですから、大学院時代は、神
経内科の所属であったにもかかわらず、分
野を横断して免疫識別学の門戸をたたき
ました。当時、千住准教授がマウスのES細
胞から樹状細胞(*)を作製する方法を確
立されていましたので、私はこの樹状細胞を
投与することで、糖尿病を発症するマウス
を治療できないかという研究を始めました。
その後、ヒトiPS細胞の樹立が報道さ
れたときは、大変驚きました。しかも、その
成果がノーベル賞の対象になったのは、山中
教授と同じ医師の立場から基礎研究を実
施する私には、励みとなっています。現在、マ
ウスを用いた実験が主体ですので、ES細

胞とiPS細胞の違いはそんなに影響しな
いという観点から、今も主にES細胞を用い
て研究を続けています。

iPS細胞ならではの問題点

―ところで、iPS細胞開発のきっかけと
なったES細胞では、受精卵(初期胚)を
使うという問題点があることや、臓器移
植した時に拒絶反応が起こるなど、多く
の社会的・倫理的な問題がありますね。

會澤さんは、熊大の再生・発生医学研
究者に関するグローバルCOEプログラム
「細胞系譜制御研究の国際的人材育成ユ

ニット」の研究者として、このような問題
点について生命倫理的立場から研究され
ていましたね。

會澤 はい。実は、熊大の発生医学研究所
は、私が着任する前にも、生命倫理の客員
教授を配置し、再生医学の倫理的・社会
的課題を積極的に議論する土壌ができて
いました。当時、このようなアプローチを実
施する研究機関は少なかったため、大変感
銘を受けました。

着任後は、実際に実験室で細胞を扱う
基礎研究者と接しながら、ヒトES細胞の
規制の枠組みやそれをめぐる議論の問題
点を洗い出すことで研究を行いました。

「研究は一人称、診療は二人称。
臨床と基礎研究の橋渡しを」

熊本大学大学院生命科学研究部
免疫識別学分野研究員

池田 徳典

Tokunori IKEDA

Profile / 2003年熊本大学医学部
卒業・医師国家資格取得後、医学
部附属病院神経内科学分野に入
局。2008年同大学院生命科学研究
部神経内科学分野博士課程へ
入学し、2011年同修了。同年産学
官連携研究員として研究および神
経内科診療も行っている。研究は
「ES細胞由来樹状細胞を利用した
自己免疫疾患動物モデルマウスの
細胞治療研究」など。



白木 ところで、ヒトiPS細胞が誕生し
て、ヒトES細胞のような問題点は全くな
いのでしょうか？

會澤 〃ない〃わけではない〃ヒトES細
胞のような問題はない〃ということですね。
―それでは、iPS細胞ならではの問題点
とは？

會澤 一つは、生殖医療への応用の問題があ
ります。iPS細胞から卵子や精子を作製
できるようにすれば、どのような人からも
容易に作れるようになりますので、不妊の
研究や診療への応用も期待されるのですが、
さまざまな形で人間の生命を「人工的に」
作り出すことへの懸念があります。

*樹状細胞・・・枝のような突起(樹状突起)を持つ免疫細胞で、免疫において司令塔の役割を担う。
この細胞の発見は、2011年度のノーベル生理学・医学賞の対象となった。

もう一つは、研究や診療用のiPS細胞バンクのために、体細胞提供者からどのような同意を得るべきか、また、プライバシーをどのように保護するかなども問題ですね。バンク化が進むと、どのように利用されるか明確でないままに登録され、多様な研究を行う研究者へ渡ってしまうので、適切なインフォームド・コンセント(*)が難しいですね。

また、どんな研究成果が出たときに、細胞提供者にどのように還元していくのか、思いがけない結果が得られたときに、それのように伝えるのかなどについても議論しておく必要があるでしょう。

つまり、iPS細胞ができたので、すべてが解決したというのではなく、実用化が見えてきたことにより、新たな問題が浮上してきたということですね。

會澤 そうですね。それから、iPS細胞の誕生により生じた問題点がもう一つあります。それは、マスコミ等の取り上げにより社会に広がるiPS細胞に対する過信です。今「再生」といえば「完治する」ようなイメージを持つ人も多いようですが、発病前と同じ程度に回復しないかもしれませんし、副作用が出て上手くいかないこともあるかもしれません。

このように現実的側面を真摯に受け止める社会体制を築いていくことも、今後の課題ですね。今、私たちに必要なことは、

再生医療のカギを握る iPS細胞

iPS細胞研究の臨床応用は、まだまだ時間がかかるものだという立場から見守っていくことでしょうか。

また、将来の医療のために、例えば、被験者として研究に参加し、ボランティアを引き受けるといった社会貢献や、それへの感謝の気持ちをもつことでしょうか。

—このような倫理的な側面に関して、基

礎研究者や治療に関わる人々が考えていくべきことではないでしょうか？

會澤 研究者や医療者は、関係者と協力しながら率先して自らの規範を示してほしいですし、社会全体として超えてはいけない線などの議論や、それに関わる法整備を、早急に進めしていく必要があると思います。また、治療をする立場の人々も、疾患なら

iPS細胞から作製した組織などをスライスし、その組成を調べる。
さまざまな最先端の機器が研究をサポート

再生医学研究の歩み

- 1880年代 「生殖細胞はすべての遺伝物質を有するが、体細胞は遺伝子を失っている」 (ドイツ・ワイスマン博士と考えられていた)
- 1935年 「胚では隣接する細胞の作用で、その細胞が将来何になるかが決まる「誘導」の概念を確立」 (ドイツ・シュネーマン博士により、同博士がノーベル賞受賞)
- 1950~1960年代 「クローンガエル誕生」 (イギリス・ガードン博士により 「体細胞にも遺伝子が含まれる」ことを示唆)
- 1981年 「マウスES細胞の発見」(アメリカ・エヴァンス博士。マウスの初期胚から細胞を取り出し、培養に成功)
- 1997年 「クローン羊・ドリーの誕生」 (スコットランド・ウィルムット博士)。哺乳類も体細胞の遺伝子情報の初期化が可能であることが明らかに。
- 1998年 「ヒトES細胞の発見」(アメリカ・トムソン教授)。ヒトの初期胚から細胞の培養に成功。
- 「クローンマウスの誕生」 (ハワイ大学・若山照彦博士(現・理化学研究所)。マウスの体細胞からクローンマウスを作製)
- 2001年 「マウスES細胞と体細胞の融合により、核を初期化」 (京都大学・多田高博士)。ES細胞にも初期化因子が存在することが明らかに。マウスのクローン胚からES細胞樹立」 (若山照彦博士)。
- 2006年 「マウスiPS細胞誕生」 (京都大学・山中伸弥教授)。遺伝子を導入し、体細胞の初期化を立証。
- 2007年 「ヒトiPS細胞誕生」 (山中伸弥教授・トムソン教授のグループも成功)。
- 2012年 山中教授・ガードン博士ノーベル生理学・医学賞を受賞





2011年9月「KEYフォーラム」で熊大を訪れた山中教授。熊本大学発生医学研究所の若手研究者たち(白木助教、右から2番目)に、熱いエールを送った

何でもiPS細胞を用いて治療するというスタンスでいくべきかについては、まだまだ議論の余地があると思います。

疾患の克服は確かに大切ですが、本来の寿命を無視した社会を作ることによるさまざまな弊害もあるでしょう。また、病気と共に生きることによって、人生の意味を見いだすという考え方もあるかもしれません。

白木 「やっついでいいことなのか、悪いことなのか」「科学的興味をどこまで許容するのか」

などの医学倫理は、私たち研究者自身も考えておく必要がありますね。

池田 會澤さん、再生医療と患者の経済力については、どうお考えですか？経済力の有無で、治療が受けられる人と受けられない人が生じる可能性がありますね。

會澤 そうですね。再生医療が高額なものになるかどうかは大切な問題です。日本は健康保険制度を利用して誰もが受けられるのが基本ですが、iPS細胞治療など効果のある治療法が高額である場合、どうすべきかは、議論が必要ですね。

ただ、希望的観測としては、開発時は高額医療となるかもしれませんが、技術の進歩による低コスト化と社会浸透が進んでいくこともありますので、期待したいところです。

すべては再生医療実現のために

池田さん、医師としての立場から向き合う基礎研究はいかがですか？

池田 研究の場合、自分で考えて進めていけることが楽しいですね。一方、今も週に一度、神経内科医として診療を行っています。診療では患者さんが主役です。私はサポート役に徹しています。こういった私の立場から、「研究は一人称で、診療は二人称」だと考えています。

また、患者さんと直接向き合うことが研究のモチベーションにもつながります。

ただ、神経内科は難病の患者さんが多い領域なので、「数年後には歩けなくなったり、場合によっては亡くなる可能性が高い」と告知しなければならぬ場合もあります。ですから、そんなことを告げなくてもよいような新しい治療法を開発したいという思いは強いです。

池田さんの研究は、臓器を作るというよりも細胞を用いた、いわゆる細胞治療ですね。細胞治療を取り巻く現在の状況と、今後の研究に対する思いを聞かせてください。

池田 すでにアメリカでは前立腺がんの患者さんで、自身の血液から取り出した細胞を使った細胞治療が開始されています。これは自身の血液から細胞を取り出して行うため、iPS細胞治療とは異なります。

現在、iPS細胞を利用した細胞治療の研究は、網膜や心筋シートなどの分野が先行しています。しかし、細胞治療の適応となりうる病気は他にも多く存在します。特に、がんなどの余命が限られている病気は、治療そのものの安全性よりも、効果の方を多く期待する傾向にあります。今後は緊急度の高い病気に対しても、臨床的な細胞治療研究を優先させて実施することが、大切かもしれません。

私もこのような観点を常に意識し、臨床

P3① 熊本大学発生医学研究所

iPS細胞やES細胞などを用いて、分子遺伝学・分子生物学・細胞生物学などを基盤に、病気のメカニズムの解明と治療、そして組織の再構築と臓器作製に向けた先進の研究を行うとともに、多くの優れた研究者を国内外に輩出している。平成24年に附属臓器再建研究センターを設置、臨床応用を目指した体制が整備された。



P3② 幹細胞部門多能性幹細胞分野 桑昭苑教授

2008年、ES細胞から「iPS」の元になる前駆細胞の作製に成功。糖尿病治療に向け、インスリンを分泌する膵β細胞を再生し、患者へ移植する再生医療の研究を進めている。



P3③ 幹細胞部門幹細胞誘導分野 江良 折実教授

iPS細胞やES細胞の分化誘導メカニズムの解明が研究テーマ。また、難病研究資源を収集し、品質管理された試料などを広く提供する「難病研究資源バンク」等難病性疾患克服に向けた研究を推進している。



P5④

幹細胞部門iPS細胞研究担当 千住寛准教授

ヒトES細胞から免疫機能を制御する働きを持つ人工樹状細胞を作ることに成功。その成果をiPS細胞へ応用し、樹状細胞を人工的に作製可能なことから、細胞医薬品として実用化を目指した研究を進めている。



と基礎研究との橋渡しを上手くしていけたらなあと思っています。将来は、多くの難病患者を助ける治療法の開発に携わっていけるとよいですね。

—白木さんと曾我さん、それぞれの研究で感じていることやその向こうにある夢などについてお聞かせください。

白木 私は薬学出身でもありますが、ヒトiPS細胞から作った肝臓やすい臓を薬の毒性評価などに使うモデル細胞にして、創薬に役立つ研究をしたいですね。

また患者さん由来のiPS細胞から分化誘導した肝臓やすい臓を作り、治療に役立つ薬を見つけていきたいと思っています。これらは、夢というよりも、実現も近い研究ですね。

難易度の高い夢としては、糖尿病の患者さんのためになる、機能的な、 β 細胞（インスリン分泌細胞）を作りたいですね。体内で正常にインスリンを分泌できるすい臓を作り出す技術は、社会的ニーズも高く、この思いは、10年前から変わりありません。

曾我 私にとってiPS細胞を用いる再生医療の最終的な目標は、遺伝子組み換えを行った細胞による移植治療。細胞の分化誘導法について多くの人が研究されていますが、実際に人に移植する際には、他の動物由来の組織が入っていない細胞を使うのが第一条件だと考えています。

また、iPS細胞から分化誘導させた細

胞には腫瘍化などの問題もありますので、それをどう選別するかなど、現実的な移植を目指して研究を続けたいですね。

熊大は、再生医学研究の拠点

—熊大で行われるiPS細胞研究の未来が楽しみですね。ところで、熊大の研究・教育環境についてはいかがですか？

白木 熊大は、ES:iPS細胞の研究は進んでいますよね。特にヒトiPS細胞の研究は、糸教授、江良教授、千住准教授が中心となって活躍なさっています。

また、教育という面でもさまざまな教育プログラムが採択されて、若手研究者をサポートする体制が充実していますね。私の場合は、平成14年度の「21世紀COEプログラム」やその後続く「グローバルCOE」によって、多くの研究・教育的サポートを受けました。これらのプログラムを通じて、サイエンスの国際公用語である「英語」に対する意識を強く持つことができるようになり、自分自身、かなり上達したと思います。

また、海外の著名な研究者と交流を持つ機会を与えてくれたり、国際学会発表の旅費をサポートしてもらったりなど多くの恩恵を受けました。研究環境も大変充実しており、各研究室にも多くの実験機器がそろっています。そればかりでなく、熊本

可能性を秘めた研究を
仕事としてやっていることは、
とても幸せなことですね



大学発生命科学研究所、遺伝子実験施設、生命資源研究・支援センター、動物資源開発研究部門など、日本国内においても最先端の施設が整っています。

「強い信念があつても、それを支える優れた環境が整っていないとうまくいかないことも多いですね。ちなみに、現在の教育環境はいかがですか？」

白木 現在、生命科学研究を推進するために二つの大きなプログラムが動いています。一つは、今年度に採択された「グローバルな健康生命科学パイオニア養成プログラムHIG O」で、これは、糸教授がそのプログラムの遂行を中心的に進められています。このプログラムでは、医学又は薬学の大学院学生に、特別プログラムを組み、「健康生命科学」という学問領域で活躍する研究者を養成するもので、英語教育の徹底や、給与、研究会費、学会参加費等のサポートをするものです。

「もう一つは、今年スタートした「柴三郎プログラム」です。これは、「柴三郎ジュニア」を発掘するために、高校生が大学の研究室で基礎医学研究を体験できるものです。このプログラムに参加している高校生たちは、皆部活みたいな感じで気軽に来ますよ。「土曜に来ていいですか?」って聞いたりして、研究者って週末も関係なく徹夜で研究しているイメージが強いのかな? いずれにせよ、子どもたちが早期に大学で研究を体験でき

ることはよいですね。

熊大の生命科学研究領域の教育環境は、過去も未来も充実していますね。

白木 とても恵まれた環境で研究させていたれているという意識を持って、研究を続けていかなければならないと思います。

「でも、本当に大切なのは、自分自身が楽しむことでもありますよね?」

白木 その通りですね。大変な時もありますが、好きだからやるというのは、皆同じじゃないかな。「自分が今日やろうと思ったことを翌日に実現できる」可能性を秘めた研究を仕事としてやっていることは、とても幸せなことですね。

実験の計画を立案し、実施し、結果を確認し、考察するなど、最後まで全部自分でできる。研究者として好きで、結果を見たくて続けているんですよ。

「曾我さんは、女性研究者としての立場も踏まえて、いかがですか?」

曾我 熊大は、女性研究者をロールモデルとして高校生に向けたセミナーを行ったり、子育て支援を実施するなど、女性研究者に対する支援も充実していますよね。不安もあります。糸教授をはじめ、女性教員が身近におり、女性研究者も増えてきて、希望を持っています。

もちろん研究に関しては、心から楽しんでいきます。新しいことを一番に知ることって、

知的興奮! 探究心が満たされますね。「サイエンスを楽しむ」が、江良教授の口癖。私もいつもそんなことを考えながら研究をやっています。

「最後に、會澤さん、古巣の熊大を訪ねて、今日の座談会、いかがでしたか?」

會澤 私は熊大での経験があったから今の仕事があると思っています。医師や研究者の倫理を学び、現場にしながら研究できたことは貴重な機会でした。

現在は、初めて人に医療機器などを試す臨床研究を行う病院にいます。補助人工心臓など新しい医療機器を初めて人に使う中で、どんなリスクがあるかを予測し、思わぬ事故に備えるための研究です。特に、被験者を守りながら倫理的に問題がないよう、病院・研究施設内の制度の整備や調査を進めています。

3月以来、熊大を訪ねてみて、皆さんがとても優秀な研究者であることを、改めて感じました。私も微力ながら努力したいと思っています。

「本日は、ありがとうございました。熊大には、皆さんのような研究者が、日夜努力していることを知ることができよかったです。今後、再生医学研究の未来を担う若手研究者として、各々の研究領域の深化と、横のつながりを大切にして、がんばっていきましょう。」

よりよい

人類の未来を目指して

コディネーター

熊大通信編集委員 首藤 剛

今号では、熊本大学でiPS細胞に関わる研究を推進する新進気鋭の若手研究者に集まっていただき、長時間熱心に話していただいた。山中教授が与えてくれた若手の基礎研究者に対する希望は、確かに、本学の研究者にも根付いていると実感した。

iPS細胞研究という観点からは、「iPS細胞は万能ではない」という認識を持つことも大切であると実感させられた。つまり、iPS細胞研究に携わる人々のみならず、私たち全員が高いモラルを持って、iPS細胞の未来の応用について考えていかなければならないということである。

最後に、今回の座談会を通じて、熊本大学は、彼らのような若手の基礎研究者が育つ優れた研究・教育環境が整った再生医学研究の拠点であることを、改めて実感できた。熊本大学での研究が、世の中に貢献するものへと発展することを期待したい。



熊本大学大学院生命科学部 遺伝子機械応用学分野 講師

Profile / 1999年熊本大学薬学部卒業。薬剤師国家試験取得後、大学院薬学研究科博士前期課程入学。同年12月から約1年間アメリカのハウスイヤー研究所へ研究留学。2001年博士前期課程修了後、同大学院薬学研究科助手。2004年から翌年にかけてカリフォルニア太平洋医療センター研究所へ研究留学し、2006年より同大学院医学薬学研究部講師。2010年1月より現職。

研究室探訪

Laboratory Exploration

倉田賀世研究室

法学部

社会保障法

年 金保険・社会福祉・公的扶助・医療保険・公衆衛生など、私たちの暮らしを守るセーフティーネットの役割を果たす社会保障制度。倉田賀世研究室では、その権利や義務を定めた社会保障法について研究を行っています。「日本では、生活のさまざまな場面で起きるリスクを未だに“個人の問題”として捉える風潮が強い」と語る倉田准教授。「例えば、保育所の待機児童の問題などもあり、働きたくても働けない女性も多い。それは個人で解決できる問題ではなく、社会全体で取り組むべき問題です。社会保障制度は、このような問題を皆で助け合い解決することで、暮らしやすい社会を実現するための制度です。学生たちには、現代社会の多様な問題に触れ、多角的な視点で物事を見る力を養ってほしいですね」。

倉 田研究室では34人の学生たちが、労災保険や生活保護などをテーマに、さまざまな判例をひも解きながら研究を続けています。例えば本当に生活保護が必要な人が申請を受理されなかったりする一方で、不正受給などの判例もあり、学生たちは「真の社会保障とは何か」という問題に向き合わなければなりません。

また、まだ若く、社会的なリスクに直面したことのない学生たちが、さまざまな立場に置かれている人たちと触れ合う機会を設けるために、社会福祉施設などを訪ね、支援活動なども行ってきました。倉田准教授は、「学外で社会的弱者の現実を知り、触れ合ってその生の声を聞くことが大切。現実から、学生たちが学ぶことは大きいものです。彼らはまた、社会保障制度の将来の担い手でもあるので、社会保障制度の在り方について、しっかりと体感して、その実現を目指してほしいですね」と語ります。

lab's data

【倉田研究室データ】

□ 研究テーマ
ドイツの家族政策

我が国において重要な政策課題となっている子育て支援政策について、「家族が担っている育児の働きを法政策の中でどのように位置づけ評価すべきか」先進的な取り組みを行っているドイツに着目した比較法研究の著書も出版。「子育て支援の理念と方法—ドイツ法からの視点—」(北海道大学図書刊行会2008年)、「第20回尾中郁夫・家族法術奨励賞」受賞

□ メンバー
倉田 賀世准教授、学部3年 16人・4年 18人

□ OB・OGの進路
熊本県庁、大分県庁、佐賀県庁、熊本市役所、佐世保市役所、下関市役所、九州厚生局、九州財務局、福岡入国管理局、ホテル日航熊本、りそな銀行、株式会社ジャパネットホールディングス、鹿児島商工会議所 ほか



Interview:

誰かの「困った」を解決する それが法学を学ぶ魅力です

法学部法学コース4年 平野 達也さん

検察官になりたくて、法曹の道へ進もうと思っていた時期もありましたが、現在は公務員を目指しています。ゼミで福祉施設などへ行く機会もあり、いろんな方と話したり、ボランティアなどにも参加するなど、実際に今生活に困っている人がいることを実感できたことは、大変意義深い経験でした。

また研究を通じて、行政と裁判所、一般市民には、それぞれの立場と違いがあり、どちらにも考慮しながら対処していく必要があることを痛感しました。市民と同じ目線に立ち、小さな問題にも真摯に向き合って一緒に解決していけるような公務員を目指したいと思っています。

法学を学ぶということは、社会に出てからいろいろな場面で、学んだ知識を活用できる。もちろん自分の権利を守ることができる上に周囲の人々も守ることができる。それが法学を学ぶ一番の理由ですね。



密着！ 倉田研究室

2012年12月、学外研究の一環として熊本労働局労働基準監督署を訪れた倉田研究室。労災補償にまつわる現場の声を聞きました。

L 15:00



村上 秀三労災補償課長より、労災の基本的な考え方や労働基準監督署の役割、労災保険法についてお話をいただき、座学で学ぶ。



社会に埋もれがちな“小さい声”に耳を傾けながら 真の社会保障制度の在り方を探る



見学後は、労災認定にまつわる現状を聞く。認定に際し、事故現場へ足を運ぶなど、現場の熱意に一同感動。学生から質問も飛び交った。



労災保険の支給に関する実務を見学。申請書をパソコンに取り込み、本省とデータを共有するなど、効率的な業務が行われていた。



保険の加入や給付、保険料の納付などを行う労災第1課・第2課の事務室を見学。それぞれの業務について話を聞いた。

巻き起こせ!“総和”のムーブメント

特集Ⅱ

我らが“紫熊祭”



「熊新プロジェクト」サインで全員集合!

赤門前に出現した巨大な「紫熊祭」のゲート。多彩なゲストを招いた華々しいステージアトラクション、子どもたちが大好きな遊具など、これまでにないプログラムがいっぱい!

18年の長きにわたり続いた「熊粋祭(ゆうすいさい)」は、2012年、新しい学園祭へと進化を遂げました。仕掛け人は学内の有志が集まった「熊新(ゆうしん)プロジェクト」の面々。

そんな学生たちの“0からの挑戦”をご紹介します。

「熊粋祭」開催の「裏側」では

1994年から18年続いた熊本大学の「熊粋祭」。近年、実行委員会の慢性的な人数不足に悩まされました。例年大変多くの人が訪れる熊粋祭ですが、2011年度の実行委員会メンバーはなんと9人。その事態は深刻でした。さらに運営資金難にも見舞われ、時は開催すら難しい状況に追い込まれながらも何とか乗り越えていました。企画運営の他に、ステージやテント設置などの裏方も担う実行委員会にとって人数不足、運営資金難は致命的。2011年12月、ついに「熊粋祭実行委員会」が解散し、学園祭の存続さえ危ぶまれる事態に直面しました。

この手で新しい伝統を作ろう

「どぎやんかせんと!」それを聞いた工学部4年・作取透磨(さくとり・とうま)さんが、なんとか学園祭を開催しようと新たな実行委員会「熊新プロジェクト」を立ち上げたのです。

「学園祭がないキャンパスライフは、学生にとってありえない。今までよりもパワーアップした新しい伝統を作りたいと思ったんです。知り合い一人一人に「学園祭を復活させよう!」と声を掛け、作取さんと同じ想いを持った13人の仲間が集まり、2012年3月下旬「熊新プロジェクト」が誕生したのです。

そして迎えた4月、新入生の獲得は大き

な要。説明会を4回も開き、「自分たちの手で新しい伝統を築こう!」と呼び掛けると、なんと34人の1年生が手を上げてくれました。「私と同じように第二回の学園祭を作ること」に魅力を感じた子も来てくれたんです。思いが伝わったようで、うれしかったですね。「熊新プロジェクト」は、いよいよ47人のメンバーで発進しました。

地域を巻き込む「総和」を目指して

最初に着手したのは、他大学へのリサーチです。「何からやればいいのかも分からない」メンバーにとって、華やかな学園祭を運営している「先輩」といえば他大学。北海道から沖縄まで、数多くの大学に連絡を取り、組織の作り方から運営のノウハウまで、教えてもらったといえます。「突然連絡をしても、皆快く教えてくれました。『頑張ってください』と励ましてくれて、力をもらいましたね」と作取さん。

少しずつ前に進み始めたころ、学園祭の名称を募集し、学生たちに呼びかけました。そして多くの応募の中から、新しい熊大の伝統を作るという願いを込めて、大学のコンセプトカラーである紫紺を取り入れた「紫熊祭」に決定! シグマといえば数字記号の「Σ」。「Σ」には「総和」という意味もあり、学内だけでなく地域の人々も巻き込んだ「総和」がキーワードに決まりました。

熊新プロジェクトの軌跡

- 2011年12月 ● 熊新プロジェクト実行委員会解散
- 2012年3月 ● 熊新プロジェクト発足
- 4月 ● 新入生向け説明会、組織編成
- 6月 ● 学内参加者に向けた第一回総会
- 7月～ ● パンフレット広告営業
- 9月～ ● 企画決定・備品制作開始
- 10月 ● 新聞・テレビ・ラジオにて告知。パンフレット2,000部を配布
- 11月2～4日 ● 紫熊祭開催



80ページを超えるパンフレットもすべて手作りで、10,000部制作した



一枚ずつリーフレットを手渡して参加を呼びかける



テレビ「若っ人ランド」などに出演し告知



①「熊新プロジェクト」代表の作取さん(左)と「紫熊祭」の顔として広報に駆け回った御手洗さん。②前日の夜、ステージのバックを仕上げる。質感にこだわり、手のひらで塗った。③看板やPOP制作は開催の直前まで夜を徹して続いた。④竹灯りでキャンドルナイトを演出。⑤「第1回紫熊祭」ミスコンクランプリに輝いた古屋敷紗耶さん(理学部理学科4年)

夢を実現するのは「諦めない力」

「熊新プロジェクト」の活動は次のステップへ。メンバー総勢47人の役割分担を明確にするため、企画・技術・広報・総務など、七つのユニットを編成しました。「どんな人に来てほしい?」「ターゲットの設定から始まった企画ユニットでは実際の企画立案を全メンバーにそれぞれ振り分けることで、「自分が考えた企画を実現する!」という個々のモチベーションを高めました。

また、その企画を実現する力を握るのは「渉外ユニット」。パンフレットに掲載する広告を営業し、資金を集める重要な任務です。営業と一口に言っても、学生であり、しかも大半は1年生。最初にはなければならないのは、電話の掛け方、領収書の書き方を教えること。そして何よりも大切なのはコミュニケーションの取り方でした。

「地域ごとのチームを作り、一軒一軒回っていくんですが、門前払いも当たり前。学生だから親切にしてもらう一方で、学生だからこそ悔しい思いもしましたね。だけど終わってみれば、予算を超える広告費をいただくことができた上に、私たちは掛け替えのない経験を得ることができました。話す力もついて、何より諦めないことの大切さを教えてもらいました」と作取さんは当時を振り返ります。

新聞・テレビ・ラジオなどで「紫熊祭」を広報すべく奔走した広報ユニットの御手洗桜さ

んは、「予算内でできることを探すのではなく、『自分たちがやりたい学園祭を実現するためにいくら必要か?』に発想転換したんです。すると前年の4倍必要なのが分かったんですが、メンバー全員でノルマを決め、協力して目標を達成することができました」と語ります。暑かった夏をスーツ姿で駆け回ったメンバーたち。夏休みが終わるころには、全員が頼もしく成長していました。

伝統を築く誇りを胸に

11月2～4日、迎えた「第1回紫熊祭」本番では、子どもからお年寄りまで二万人を超える来学者を動員し、大盛況を納めました。「熊大生から熊本の皆の力を合わせて一緒に学園祭を作りたい」。熊新プロジェクトのメンバー全員の想いがつになった3日間でした。そして「第1回紫熊祭」が終わり、毎晩のように皆で泊まり込んでにぎやかに作業を続けていた部室では、今は静かに来年の開催に向けた準備が進められていました。

来年のメンバーは25人。「自分たちはスゴイことをやっているんだと自覚を持って、このプロジェクトを誇りに思ってもらいたい」と作取さん。御手洗さんは「紫熊祭」を代々受け継いで、実施する人も、訪れた人たちにも「生心に残る学園祭に育てて」と願っています。たった二人の声から始まった「紫熊祭」は、伝統への第一歩を踏み出しました。

研究に、慈善活動に、仲間たちと切磋琢磨した日々

法学部法学科3年 石黒大貴さん

2011年9月から2012年5月まで、カリフォルニア州パシフィック大学で法律を学んだ石黒大貴さん。授業や学内活動を通じてアメリカの現状を体感。グローバルな視野が身についたと語ります。

● アメリカ

交 流



ボランティア活動などを通じて、親交を深めたフラタニティの仲間たち(写真手前左)

ニューヨークに留学した先輩の話を高校時代に聞き、世界の人たちの役に立てるような仕事がしたいと思ったのが、法律家を目指すし、留学に興味を持ったきっかけです。大学で法学を学ぶ中で、パシフィック大学は法学教育で有名なこともあり、日本学生支援機構の奨学金を受け留学しました。

私が一緒に学んだ学生たちは、「パシフィック・リーガル・スカラーズ・プログラム」に属し、法律家を目指す志の高い人ばかり。先生方の多くは、現役の裁判官や弁護士で、アメリカで起きている事件や判例についてリアルタイムな情報を聞くことができました。

アメリカの大学で実感したことは、熊大で日本の法律について徹底的に学んでいて

よかったということです。

日本とアメリカの法体系は違います。

ドイツやフランスから導入された議会制定法をベースとする「大陸法」を基準とする日本と、過去の判例の蓄積をベースとした「判例法」を基準とするアメリカ。熊大でしっかり基礎固めをしてきたおかげで、日本とアメリカの法律を比較し、それぞれの理解を深めることができました。また留学中も、ゼミの澁谷洋平先生に助言を受け、積極的に研究を進めていきました。

授業のほかに、「ファイ・アルファ・デルタ」という学内にあるフラタニティ(友愛会)にも所属していました。フラタニティは全世界にあり、著名人も属していた歴史ある社交組織です。ホームレスの炊き出しなどのボランティア活動を通じ、アメリカの現状を知り、仲間とのきずなを深めることができました。将来は、アメリカと日本で弁護士資格を取り、企業法務や知的財産にかかわる仕事になりたいですね。



教授との晩餐会で、お世話になった労働法のトーマス・ブライアトン教授(左)と、ビジネス法のローリー・レクターヒース教授とともに

International exchange Report

国際交流レポート
平成24年9月~11月

9 / 1

平成24年度ドイツ・フライブルク短期留学プログラムを実施(9月31日~10月26日まで)

ドイツ語講座、ドイツの歴史、社会、技術などに触れる研修活動および自由研修旅行等に学部生22名が参加しました。



11

教育学部附属小学校の児童が上海を訪問(14日まで) 12名の児童が、本校協定校の上海師範大学附属小学校等を訪問し、現地児童と交流しました。



28

スラバヤ工科大学(インドネシア)において広報セミナーを開催 熊本大学への留学に関心のある学生約150名が参加しました。

10 / 5

本校の協定校であるモンタナ大学(アメリカ)のTeresa Brancy副学長が谷口学長、原田副学長を表敬訪問

16

スラバヤ工科大学(インドネシア)Dr. Maria Anthesari国際室長が原田副学長を表敬訪問

27

谷口学長がホーチミン工科大学(ベトナム)創立55周年記念式典に出席

29

第7回学生国際会議(CAST 2012 Seoul)を開催(30日まで)



世界から熊本大学へ

熊本で一番アカデミックな場所で ラオスの活性化を目指して

大学院社会文化科学研究科博士前期課程公共政策学専攻2年
パトゥムサイ・スーサダーさん

2009年来熊したラオス出身のスーサダーさん。
故郷によく似た湯布院を舞台に
日本のまちづくりについて学び、考察を重ねながら
いつか母国の発展に役立てたいと願っています。



「熊大で一番好きな場所」とスーサダーさんが語る五高記念館の前にて

私は高校時代に「熊本ラオス友好協会」の奨学生制度を受け、教育施設が整ったピエンチャンの高校で学びました。かつてラオス大使も務めた同会の会長は熊本県出身で、「熊本で日本のことを学んでみないか?」と言ってくださったことがきっかけで、熊本へ来ました。

最初は語学専門学校で日本語を学んでいたのですが、どうせ学ぶのであれば、語学だけでなく、日本の文化や経済、法律などについて学びたいと思い、熊本の大学院に入学しました。専攻は公共政策学で、特に湯布院のまちづくりについて研究しています。

湯布院は、豊かな自然や田園風景に恵まれ、私の故郷によく似ています。この小さな

町に、どうして住民の約2倍もの観光客が押し寄せるのかに興味を沸き、ラオス活性化のためのヒントを得ることができているのではないかの思いで研究を始めました。

湯布院の役場や民宿、旅館などを訪ねて直接話を伺ったり、町並みに関する条例などを読みながら、成功事例や、その反面出てきたさまざまな課題などを考察しています。

初めて熊大にきたとき、歴史のある赤門や五高記念館の重厚な雰囲気感動しました。夏目漱石が教鞭を執った学校でもあり、現役の先生方も皆素晴らしい経歴の持ち主ばかり。熊本で一番アカデミックな場所に来たんだなあと、身が引き締まる思いだったことを鮮明に覚えています。

熊本で好きな場所は、天草です。内陸部に位置するラオスの人たちにとって、海はあこがれ。ほとんど食べたことがなかったお刺身も、今では子飼商店街でコノシロを買って自分でさばいて食べるほど大好きになりました。

将来は、ラオスに戻り、学んだ知識や日本語力を生かして、ラオスの発展のために尽くしたいですね。



湯布院ののどかな景色。故郷への思いを新たに、研究にいそむ日々

11 / 1

ソウル市立大学(韓国)と本学大学院自然科学研究科の主催で、韓国・ソウルにて開催し、4カ国・8大学から116件の研究発表が行われました。

多自由度を内包する新規機能物質の国際シンポジウム(SAMMDOF: International Symposium on Advanced Materials Having Multi-Degrees-of-Freedom)を開催(2日付)

衝撃・極限環境研究センターおよび自然科学研究科の主催で約80名が参加しました。

5

「留学生と保健学系学生との交流会」(第2回)を開催

保健学系国際化推進委員会の主催で開催し、学生教員ら64人が参加しました。

7

平成24年度海外留学成果発表会

熊本大学くすの木会館にて開催し、学生約40名が参加しました。



14

第10回日本・ブラジルのエネルギー・環境持続的発展に関する国際ワークショップを開催

日本およびブラジルの研究者による発表・議論が行われ、留学生を含む大学院生および研究者等約140人が参加しました。

26

ニューカッスル大学(オーストラリア)英語および基礎教育課程センター長のSamus Teagan 准教授が本学を訪問

27

生体資源研究・支援センター(CS&S)と国立研究所と部局間交流協定調印式を実施

今後、両機関における遺伝子改良マウスの胚・精子の凍結保存に関する情報交流の促進が期待されます。



法

法の下で公共事業を遂行 より良い県政の担い手に



関 雅之

Masayuki SEKI

熊本県土木部 用地対策課
勤務

法学部法律学科・平成7年度卒

昭和49年熊本県熊本市出身。熊本県立第二高校理数科卒業。卒業後、民間企業就職を経て熊本県庁に入庁し、総務・農政・土木関係業務を経験。現在は妻、娘3人の5人家族。趣味はロードバイク（自転車）、クラシックギター。

熊大のココがイイ!

自由な校風と緑あふれる
素朴なキャンパス。
そして伝統を感じさせる
ところですね。

「熊大法学部合格したい」
目標に向かって一直線

将来については、ばく然と「普通にサラリーマンになり、平穏な生活を送る」というイメージくらいしか抱いていませんでした。それよりも、「一生懸命勉強して、熊大法学部合格して、大学では勉強も趣味も、思う存分好きなことをやりたい!」という気持ちが強かったです。

音楽とともに過ごし、友と飲む
生き生き、充実した大学生生活

勉強よりもマンドリンクラブというサークルに入って、一日中楽器の練習をしたり、指揮者として県立劇場の舞台に立ったり、鹿児島や大分でもタクトを振るなど、音楽漬けの毎日でした。子飼界限では、部員と夜な夜な焼酎を飲んだりもしました。仕事で法律を扱ったりする今となっては、もっと勉強に励むべきだったと真剣に後悔しているところです。

公正な“法の目”を生かして
県民の不利益を防ぐために奔走

現在、公共事業等で必要な土地の取得が困難な場合に、権利者の意に反して強制的に土地を取得するという土地収用制度に関する事務を担当しています。この制度は、とかく強権的なものと思われがちですが、厳格な手続を経ることにより、公共事業等施行者による権利の濫用を防ぐ大事な使命も担っていますので、それを念頭に業務に当たるようにしています。

卒業生 ジャーナル

Graduates' Journal

本学の卒業生たちの“今”に迫る
「卒業生ジャーナル」。
熊本県内はもとより、国内外で活躍する
先輩たちのこれまでの歩みや苦労、
そして喜び、楽しみなどを通して
精励するその姿をご紹介します。

薬

安全で効果的な 薬物療法を目指して



竹内 耕治

Koji TAKEUCHI

佐賀大学医学部附属病院
薬剤部(佐賀) 勤務

薬学部薬科学科・平成16年度卒/大学院薬学研究科博士前期課程薬物動態制御学講座平成18年度修了

昭和56年佐賀県唐津市出身。県立唐津東高校卒業後、熊本大学薬学部へ。大学院博士前期課程修了後、佐賀大学医学部附属病院 薬剤部に就職。

熊大のココがイイ!

アットホームな雰囲気と
切磋琢磨できる仲間
に出会えるところ。

化学や生物が好き
“食品と薬効”に興味を持ち受験

もともと化学や生物が好きで、将来はそういった分野に進みたいというばく然とした思いしかありませんでした。ある時、薬の効果が食品との飲み合わせで大きく変化することを知り、体内で薬がどのように動くのかに興味を持ったことが、薬学部を志すきっかけとなりました。

講義に、部活にと大忙し
教授や仲間たちに支えられ研究

3年までは、講義・実習もありましたが、所属していたバレーボール部の練習、試合やアルバイトが中心の生活でした。研究室に所属してからは、深夜まで実験の日々。実験もプレゼンテーションもなかなか上手くいかないことが多かったのですが、教授・先輩・同期・後輩など、たくさんの方に支えていただいた大学生生活だったと思います。

病棟で薬剤管理指導
大切なのはコミュニケーション

調剤、抗がん剤調整などの業務を経験後、現在は病棟に常駐して薬剤管理指導を行っています。患者さんや医師・看護師・理学療法士・管理栄養士など病棟スタッフとのコミュニケーションを大切に、安全で効果的な薬物療法を継続していくために、薬剤師としてどう貢献できるかを常に意識し、業務を行っています。

理

地球の環境を守りたい 社会の要望に応えるために



森川 太郎

Taro MORIKAWA

一般財団法人
九州環境管理協会(福岡)
勤務

理学部理学科・平成19年度卒/大学院自然科学研究科理学専攻博士前期課程・平成21年度修了

昭和60年長崎県長崎市出身。生物・化学分野に興味があり、長崎県立長崎西高校卒業後、科学を広く学べる熊大法学部へ。理学の基礎を学ぶ中で、海洋生態に興味を持ち、沿岸域環境科学教育研究センターの研究室を経て現在の会社へ入社。

熊大のココがイイ!

自然に囲まれた、良い
雰囲気での研究が
できること。

生物・化学などに携わる
研究者になりたい!

幼い頃から科学が好きで、高校では生物・化学を選択し、生物・化学に関わる仕事をしたい、もしくはそういう研究者になりたいと何となく考えていました。「これ」といった職業は考えていませんでしたが、「自分の好きな科学を生業としていきたい」というのが高校の時の夢でした。

沿岸域環境科学教育研究センターの
研究室で充実のフィールドワーク

学部1年～3年はサイクリング部の活動が中心でした。平日はトレーニングし、週末は一日かけて遠出したり、月一回は荷物を積んで1泊2日の旅をしたりしていました。学部4年からは沿岸域環境科学教育研究センターの研究室に入り、上天草でのフィールドワークが中心となりました。本学との行き来が大変でしたが、他の研究室とはひと味違った充実した研究室生活を送ることができました。

水生生物の環境調査
熊大で得た人脈が力に

現在は環境調査の仕事の中でも、水生生物部門担当の部署で働いています。海や川などに行き、生き物を探取して種類や数を調査し、さらにそれらの調査結果を用いた報告書の作成をしています。熊本大学で得た知識や人脈が、今の仕事において貴重な宝物になっています。

工 研究所やオフィスビルなど 建築に携わる夢を叶えた!



西田 大樹

Daiki NISHIDA

大成建設株式会社
関東支店建築部 作業所
(埼玉) 勤務

工学部環境システム工学科・平成15年度卒
大学院自然科学研究科建築学専攻博士前期課程・平成17年度修了

昭和56年福岡県柳川市出身。福岡県立伝習館高等学校から熊本大学を経て大学院へ、当社のキャッチコピーである「地図に残る仕事」を数多く手掛ける事が現在の夢です。

熊大のココがイイ!

尊敬できる先輩や先生が多数在籍されている。付近においしい定食屋さんがたくさんある。

建築設計や都市開発
ばく然と脳裏に描いた将来

さまざまな媒体を通して知った“建築”に興味があり、その中でも建築設計という仕事に就き住宅や種々のビル等の設計を手掛けたいという夢を持っていました。そのほかにも都市開発という分野でまちづくりをしておくのも楽しそうだとばく然と考えていました。

インターンシップで自己確認
ものづくりの現場へシフト

学科の講義・設計の実習等で忙しい毎日でしたが、友人たちと切磋琢磨しながら時にはハメを外し、楽しい大学生活を送ることができました。また、インターンシップに行かせていただき、企業・仕事を知ることで自分を見つめ直し、自分にとっては設計よりも実際に現場でのものづくりをする方が合い、楽しめるということに気付くことができたのが大きかったです。

憧れの“建築”の現場へ
竣工に向けて日々奮闘中

大成建設(株)に入社し、関東支店(埼玉・群馬・栃木)に配属され、現場管理の仕事をしていただいております。これまで、研究所・オフィスビル・物流倉庫等の新築工事に携わってきました。現在は埼玉県さいたま市大宮区において、専門学校の新築工事の監理技術者・工事責任者として竣工に向けて奮闘しています。一流の技術者になるべく日々精進しております。

医 世界の人々とコミュニケーション 明日の健康を守る医療機器を届ける



田上 祥子

Sachiko TANOUÉ

株式会社日立メディコ
クリニカルサイエンス部
(千葉) 勤務

医療技術短期大学部診療放射線技術学科・平成13年度卒

昭和54年熊本県荒尾市出身、熊本県立玉名高校卒業。休日は映画やアメリカのドラマを見ることが多い。最近は「Bones-骨は語る-」、「アグリペティ」にはまっています。

熊大のココがイイ!

先生と生徒の距離が近い。親しみやすい。今でも時々集まって食事をしたりします。

本を読むことが好き!
英語が苦手だった高校時代

特別に「こんな道に進みたい!」と明確な目的はありませんでした。高校で理系クラスに進んだので、ばく然と理系へ進学かなと考えた程度。本を読むことが好きだったので、文系の分野にも興味がありました。いまいち英語の成績が振るわなかったのですが、英語が必須の仕事に就くとは夢にも思いませんでした。

3年制ならではの和の中で
学び、実習・実験の日々

当時3年制の学科で選択授業が少なく、ほぼ3年間同じメンバーで過ごすので、クラス替えのない高校生活の延長のような和気あいあいとした感じでした。医学・工学・理学を混在させたような授業は幅広く大変でしたが、グループ実習・実験は面白かったです。

医療機器の製造販売を通じて
海外研修や国内外の人々と交流

医療機器の製造販売会社で、私が担当となったのは米国から輸入しているマンモグラフィ装置。輸出元の会社と英語でのメールのやり取りや、製品研修で海外に行くことも。主な業務は納入先の病院での取り扱い説明や展示会での製品説明。社内の営業やサービス員への教育も行ったりと、多岐にわたります。医療関係者を中心に国内外のさまざまな人たちとの交流が難しくもあり、やりがいのある仕事です。

教 ものづくりの楽しさ伝え、 特別支援教育に向き合う



渡邊 満

Mitsu WATANABE

熊本県立熊本支援学校
勤務

教育学部中学校教員養成課程美術科・平成18年度卒/大学院教育学研究科修士課程教科教育専攻・平成20年度修了

昭和59年熊本県菊池市出身。熊本県立鹿本高校卒業後、熊本へ。専修学校モア・ヘアメイクカレッジでの講師を経て、現在に至る。現在も絵画制作は継続中。東野圭吾の小説がややマイブーム。

熊大のココがイイ!

自然と伝統と、味わい深い地域に囲まれていることです。

漫画家や建築デザイナーなど
漠然とした夢に向かって

高校生の時に明確な夢はありませんでした。もともと絵をかくのは好きだったので、「漫画家とか建築デザイナーとか画像設計の仕事ができればカッコいいなあ」なんて思っていました。とりあえず絵を描いたり、創作したりできる仕事がいいなど漠然と考えていました。

油彩制作にのめり込んだ院生時代
支えてくれた家族に感謝

学部生の時には、先輩方に影響を受けながら毎晩遅くまで美術制作をしたり、サークル活動やアルバイトにも励みました。大学院では油彩制作にのめり込んで、絵具のにおいが充満した画室にこもり、ひたすらコンクール等に作品を出品していました。実家から1時間かかる通学の日でしたが家族の支えもあり、充実した制作生活を過ごせたと思います。

個性豊かな子どもたちと
一緒に勉強の日々

現在は熊本支援学校の高等部で教師をしています。中学校の美術教員として採用されましたが、縁あって特別支援教育の場で働くことになり、今年で3年目。個性豊かな子どもたちと体を動かしたり、ものづくりなどの学習を通して、毎日一緒に勉強に励んでいます。絵画制作も続けており、全国公募展にも毎年作品を出品しています。

文 夢は熊本弁を巧みにあやつる 母校のコリア語教員



後藤 祐司

Yuji GOTO

ソウル大学言語学科
音声実験室(韓国)
博士課程

文学部文学科・平成19年度卒/大学院社会文化科学研究科博士前期課程・平成21年度修了

昭和59年熊本県上益城郡甲佐町出身。熊本県立宇土高校卒業。言葉に興味があり、研究を続ける。将来の夢は母校の熊本大学で熊本弁を巧みにあやつるコリア語教員になること。趣味は旅行と下手くそなピアノ。

熊大のココがイイ!

自由に研究をさせてくださる先生方と留学のための奨学金制度。

コミュニケーションを支える
言葉の法則を知りたい!

高校では地学が特に好きで、自然のさまざまな現象が、色々な法則で表せることが不思議だったからです。これはまた私たち人間にとっても同様で、日々コミュニケーションの道具として用いる言葉の法則などを知りたくて、言語学が学べる熊大を受験しました。

5カ国もの言語や方言
コンピューター言語まで学ぶ

せっかく言語学を学びに来たのだからと、英語はもちろん色々な外国語の授業に参加していました。入学してすぐ初修外国語は中国語を選択し、選択授業ではアラビア語、中学・高校の教員免許を取得したドイツ語、韓国での語学研修にも参加した韓国語など。また、熊本の方言や、コンピュータ言語といったものまで、とにかく言葉について学ぶ日々でした。

アクセント・イントネーション
言葉と音に魅せられた研究へ

韓国政府大学院奨学生に選ばれ、今はソウル大学言語学科博士課程に所属しています。言葉、その中でも特に発音に興味を傾きはじめ、日本語や朝鮮語のアクセント・イントネーションを中心に、研究を続けています。加えて、外国の方に日本語を教える、逆に私たちが外国語を学ぶときどうやったら発音を効率よく習得できるかといったことにも関心があります。

INTERVIEW

「若者たちよ、“世界の中の日本”というグローバルな視野で世界を目指せ」

一熊大OB特別インタビュー 日本製紙(株)グループ本社および日本製紙(株) 代表取締役社長 芳賀 義雄氏



平成24年9月29日(土)工学部百周年記念館にて、財団法人熊本工学会設立30周年記念講演会に登壇。「日本製紙 東日本大震災を乗り越え明日への軌跡を描く」と題し、被災から復興までの歩みを講演

Profile

日本製紙(株)グループ本社および
日本製紙(株) 代表取締役社長
芳賀 義雄 Yoshio HAGA
熊本大学工学部工業化学科・昭和47年卒
同大学院工学研究科・昭和49年修了

一熊大を受験した経緯と大学時代について教えてください。

熊本市の出身で、就職も地元でしようと思っていました。産業の発展に参画したいと熊本大学工学部工業化学科を受験したんです。

名誉教授になられた本里義明先生の講座で、後の副学長・平山忠一先生が助手をなさっていました。研究テーマは「高分子ポリエチレンの物性」ですが、当時は学園紛争で騒然となっていた時代。休校も多くて、学友と山に登ったり、キャンプに行ったりして、自由を謳歌していましたね。人生の中でも思い出深い時代です。

一そして大学院修了後、日本製紙の前身である十條製紙へ。どんな職務を経験したのですか？

最初は工場の現場に配属されて、その後研究やヨーロッパでの海外駐在、営業、製造部門管理など、工場長も経験しました。これだけ経験しているのは、我が社でも珍しいですよ。

さまざまな部署に行く中で、自分が将来どのようなレベルで仕事に取り組むのかという意識が生まれてきます。先々を見据えて、上司の指示についても自分だったらどのように指示するかなど、考えていましたね。

一そういった経験が社長業にも生かされているんですね。

そうですね。ご存じのように我が社は紙を作り、皆さまへ提供して、日

常生活を豊かにする役割や新聞や雑誌、書籍などを通じて、文化への貢献も担っています。

基本はものづくり。今、日本がどうあるべきかを問われる中で、ものづくりを通じて支えて行かなくてはなりません。また、大学にも役割がありますね。特に工学部の学生たちは、もっとチャレンジ精神を発揮して、研究にまい進してもらいたい。それが、将来につながると思っています。

日本が今まで培ってきた技術を磨いて、世界で一流と評されるようなものを作り出していかなくてはならない。それができないと“強い国”であり続けることは難しいと思っています。

一熊大の学生たちや熊大予備軍の若者たちに、メッセージをお願いします。

“森の都”熊本は九州のど真ん中にあり、熊本城などの文化遺産、そして第五高等学校の伝統もある。この中で学ぶことができるのは素晴らしいことです。

これから日本を支える学生の皆さんは、インターネットをはじめとするグローバルなツールを使って、グローバルな研究を進めてほしいですね。自分の人生を考える上でも同じことです。社会に出れば、「世界の中の日本」という認識が必要になります。グローバルな視点を持って、世界に飛び出して行ってください。

REPORT

名誉フェローの称号が授与されました

平成24年11月3日(土)、熊本大学名誉フェロー称号授与式が行われました。

名誉フェローは、本学の運営および経営に顕著な貢献があった方や本学に在学・勤務された方のうち、政治、経済、芸術、文化、スポーツ等の各界において優れた功績があった方などに授与するもので、今回、江口 工(たくみ)氏(前・鉦研工業株式会社代表取締役社長)、前田勝之助氏(東レ株式会社名誉会長)、船津昭信氏(一般財団法人化学及血清療法研究所名誉理事長・名誉所長)に授与されました。

当日は、各理事および関係部局長



席の列席のもと、学長から称号が授与され、お祝いの言葉を述べられた後、記念撮影が行われました。

REPORT

「熊本大学60年史部局史編」を刊行

「熊本大学60年史編纂事業」の中で、写真集に続く2巻目となる部局史編を平成24年10月30日に刊行。本学の各学部・センターの歩みや地域社会との連携事業、国際社会との関わりなど、部局単位で記しています。本学附属図書館や東京・関西オフィスなどで閲覧可能です。



REPORT 「夢科学探検2012」を開催

小学生から一般の方へさまざまな実験を通して科学体験をしてもらおうと、「夢科学体験2012」を平成24年11月3日(土)に開催しました。「理学部探検」「工学部探検」などでは「わくわく実験100テーマ」と題し、各学部で盛りだくさんの実験を用意。子どもたちをはじめ、多くの方が参加しました。

「もの・クリChallenge」の今年のテーマは「くまモンへの贈り物」。日頃、熊本県営業部長として全国を駆け回るくまモンに使ってほしいグッズの数々が登場。くまモンも登場して自ら審査を行い、ステージ狭しと大活躍!会場を盛り上げました。



「もの・クリChallenge」で最優秀賞を受賞したのは、くまモンの移動用スケートボード

いつもと違うシャボン玉に子どもたちは大喜び

REPORT 新生「紫熊祭」と「本九祭」「蕃滋祭」が開催!

平成24年11月2日(金)~4日(日)に熊本大学の元気を発信する学園祭が開催されました。黒髪キャンパスでは今年新しく生まれ変わった「紫熊祭」(詳細は、本誌13~14ページ参照)、本荘・九品寺キャンパスでは「本九祭」、そして大江キャンパスでは「蕃滋祭」と、各キャンパスで趣向をこらした催しが繰り広げられました。

「本九祭」では、話題の「iPS細胞」なども展示。大人から子どもまで、多くの人々が電子顕微鏡を覗き込んでいました。

また「蕃滋祭」では、模擬講義や模擬薬局などを開催。やけどの薬として知られる紫雲膏作りや水の硬度実験などが行われました。



本荘・九品寺キャンパスの「本九祭」。「iPS細胞」は子どもたちも興味深々

大江キャンパスの「蕃滋祭」では、研究室の実験機材を前に、小学生がするどい質問を投げかけるひとコマも



REPORT 第7回ホームカミングデーを開催しました

平成24年11月3日(土)、本学OB・OGを招いて「第7回ホームカミングデー」を開催しました。四つのキャンパスツアーの中から好きなコースを選び、母校の“今”に触れていただきました。

その後、会場を工学部百周年記念館に移し、近況報告や学生たちとの交流のほか、学生によるアトラクションなどが披露され、盛況のうちに会は幕を閉じました。



REPORT 「科研費」審査委員の表彰が行われました

(独)日本学術振興会では、科研費の審査において模範となる審査意見を付した審査委員を表彰することとしており、平成24年11月6日(火)・7日(水)、平成24年度「科研費」審査委員の表彰が行われ、本学から生命科学部・江藤正俊教授と同・富澤一仁教授が表彰されました。

本表彰に先駆けて、約5,000名の第1段審査(書面審査)委員の中から115名の選考があり、江藤教授と富澤教授が選考されたものです。両教授には谷口学長および原田研究担当理事から表彰状と記念品が伝達されました。

REPORT 「マンスフィールド財団タスクフォース:進化と繁栄を共有するための現代日米ビジョンの構築ー日米ビジョンの発表・公開セミナーin 熊本ー」を開催

平成24年12月5日(水)、熊本大学工学部百周年記念館を会場とし、トーマス・シーファー前米国駐日大使を筆頭とする、マンスフィールド財団タスクフォースメンバーが来日して公開セミナーが開催されました。

日本の6地方都市を巡る中で、熊本が九州で唯一の開催地となり、九州各県の有識者や一般市民および大学教職員、学生など、約200名が参加。本学法学部の伊藤洋典教授がコメントーターを務め、タスクフォースが掲げる構想(ビジョン)について、参加者と熱心な意見交換が行われました。人材交流への投資拡大、共通の経済課



参加者からの質問に答えるマンスフィールド財団理事のJ・トーマス・シーファー氏

題、地域の成長と安定のエンジンとしての貿易促進における日米協力、地域規模課題に対する二国間アプローチなど、様々な日米の協力事案につい

でのテーマが取り上げられ、日米の相互理解において大変有意義な機会となりました。

REPORT

星野准教授・小林教授らが、
2012年度「グッドデザイン・サステナブルデザイン賞」を受賞

自然科学研究科・星野裕司准教授および小林一郎教授と各研究室が設計から施工まで携わった、鹿児島県伊佐市の「曾木の滝分水路」が2012年度「グッドデザイン賞」を受賞、さらに特別賞である「グッドデザイン・サステナブルデザイン賞」(経済産業大臣賞)を受賞しました。この分水路(洪水を分流する施設)は、平成18年に起きた記録的な豪雨による災害復旧を目指した直轄河川激甚災害対策特別緊急事業の一環として建設されました。災害復旧にとどまらず、「曾木の滝」と連動し、アメニティの確保といった新たな価値を地域に創出した事が土木的にも画期的



であると高い評価を受けました。

「サステナブルデザイン賞」とは、今年度の受賞対象の中から、持続可能な社会の実現を目指しているものに贈られる賞で、今年は4件が選出されました。



GOOD DESIGN AWARD 2012

SUSTAINABLE
DESIGN AWARD

「曾木はっけんウォーキング」などのイベントも開催。水と触れ合いながら、防災意識の向上にもつながる。



平成24年11月4日(日)「東京ミッドタウン」で行われた「グッドデザイン・ベスト100 デザイナーズ・プレゼンテーション」で発表する星野准教授

INFO

体験講座「遺伝子と仲良くなるろう」を開催します



「遺伝子って一体何なのだろう?」そんな疑問をお持ちの方に、簡単な実験を体験してもらいながら分かりやすく説明します。

日 時/平成25年2月9日(土)～

10日(日) 11:00～16:00

場 所/熊本大学生命資源研究・支援センター

遺伝子実験室6F講義室

対 象/中学生以上 参加費/無料
事前申込/ホームページから申込用紙をダウンロードしてFaxまたはメールでお申し込みください。

【問い合わせ】

生命資源研究・支援センター 遺伝子実験室

Tel.096-373-6501

Fax.096-373-6502

E-mail: idenshi@gtc.gtca.kumamoto-u.ac.jp

URL: <http://gtc.egtc.jp/idenshi/view/exp/rikai2012>

REPORT

地域防災セミナー—減災型社会の実現に向けて—を開催

平成24年11月13日(火)「熊本市民会館崇城大学ホール」において、「地域防災セミナー」を開催しました。

平成24年7月に熊本県内に甚大な被害をもたらした九州北部豪雨と、同年9月の台風16号の被害状況について、大学院自然科学研究科・北園芳人教授と同・山田文彦教授より調査報告を行いました。

また、熊本県と熊本市からは行政での地域防災に関する取り組みの進捗を報告。地域の防災がテーマとあって満席となった会場からも声上がり、活発な意見交換が行われました。



「減災型社会システム実践研究教育センター」設立を報告し、「安全安心な地域社会の実現を」と呼び掛ける谷口学長

REPORT

工学部研究資料館で「秋の夕暮れコンサート」を開催しました

秋の黄昏(たそがれ)のひとつときをクラシック音楽とともに過ごしてもらおうと、平成24年11月9日(金)に「秋の夕暮れコンサート」を開催。会場の工学部研究資料館には、生演奏を楽しもうと多くの聴衆が集いました。

コンサートは、バイオリンと琴の二重奏「春の海」で始まり、会場は雅な雰囲気。そのほか、熊大フィルによる弦楽アンサンブル、金管アンサンブルをはじめ、熊本日独協会合唱団コール・クワイゼルの合唱などが続き、会場は大きな拍手に包まれました。

また、国の重要文化財に指定されている建物と動態保存されている工作機



レンガ造りの建物は音響が良く、美しい音色が響きわたる

械について、自然科学研究科・伊藤重剛教授による紹介の後、実際に機械を動かして見せると会場からはどよめきが起こりました。

熊本大学基金へのご協力に感謝し、心より御礼申し上げます。

No.20(平成24年9月1日～平成24年11月30日)

卒業生の皆さま、在学生の保護者の皆さま、法人・団体等の皆さま、本学の退職者及び教職員の皆さまからご寄附をいただき、平成24年11月30日現在、その寄附総額は約5億2017万円となっております。皆さまのご協力に厚く御礼申し上げます。

今号では、平成24年9月1日から平成24年11月30日までの間に入金を確認させていただきました個人115名、4法人・団体等の寄附者すべての皆さまへ感謝の意を込め、ご芳名を掲載させていただきます。公開を希望されない寄附者につきましては、掲載しておりません。

また、万一お名前がもれている場合は、誠に恐縮ではございますが、基金事務室(電話:096-342-2029)までご連絡ください。皆さまの更なるご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1. お名前・寄附金額の掲載を希望された寄附者

(寄附金額別、五十音順・敬称略にて掲載させていただきます。) ※ ()内の数字は、累計寄附金額(万円)です。

【100万円】	芳賀 義雄(105)					
【20万円】	田中 征治(40)					
【10万円】	池松 静香(5030)	菊池 健(70)	藤井 博行(30)	森田 敏子(30)	熊本電友会	
【5万円】	町田 和美(26)	赤星 敦				
【5万円未満】	赤星 宏輝	井上 虎雄	内田 豪峰	田代 みゆき	永野 明子	濱崎 欣明(16)
	平塚 功一	三小田 眞彬	山田 龍也	山本 博伸		

2. お名前のみ掲載を希望された寄附者

(五十音順・敬称略にて掲載させていただきます。) ※ []内の数字は、累計寄附回数(回目)です。

有光 克之[3]	池上 林	石島 清	今井 博昭[5]	上塚 昭逸[2]	牛島 進[2]	大久保 正博
大塚 晃	大橋 健一	緒方 耕治	緒方 雄輔[5]	片山 啓次郎	木田 建次	木塚 正敏
九反田 利秋[4]	国場 律宏[2]	相良 勝郎[3]	佐土原 浩[3]	澤井 元生	重信 明寛[3]	篠原 武志
澁谷 明人	関 利秀	東郷 敬一郎	時枝 榮三	富澤 一仁	長崎 孝博[3]	永田 昌知[3]
西 一徳	西 惟義	西見 裕司	野口 雅章[3]	野村 茂治	葉石 眞治[3]	浜口 晃[3]
福島 幹郎[3]	福田 康敏[2]	前垣 宏澄	松見 里美[3]	蓑田 盛行[2]	向田 敬二[3]	山角 清秀
山口 公義	山西 次男	吉里 實[5]	吉永 敬三	吉永 敏之[2]	笠 裕之[2]	
医療法人社団古家内科医院		株式会社ニュースカイホテル[3]		堤化学株式会社[6]		

3. お名前・寄附金額の掲載を希望されない寄附者

個人49名

REPORT 「第2回熊本大学関西連合同窓会」に約180名が参加

平成24年12月1日(土)、大阪市の太閤園で関西地区在住の同窓生及び谷口学長をはじめ大学関係者など約180名が参加し、第2回熊本大学関西連合同窓会が開催されました。

同窓会では最初に総会・講演会が行われ、西山多加志関西連合同窓会会長(S44工)、岡村宏同窓会連合会会長(S29年工)から挨拶があり、続いて谷口学長より「激動時代における熊本大学の社会的役割」と題し、また桑野幸徳関西連合同窓会名誉会長(S38理)より「新制度、固定買取制度で大きく飛躍する太陽光発電の現状と将来展望」と題して講演が行われ、

出席者は熱心に聴き入りました。続いて行われた交流会では、九鬼義英東京連合同窓会会長(S28法文)の挨拶の後、桑野幸徳関西連合同窓会名誉会長の発声で乾杯が行われ、同窓生は、久しぶりに再会した懐かしい学友と学生時代の思い出話などに花を咲かせました。

会の最後には、現役学生の体育会応援団とともに出席者全員で『五高寮歌』を熱唱し、大盛会のうちに閉会となりました。



西山 多加志 関西連合同窓会会長